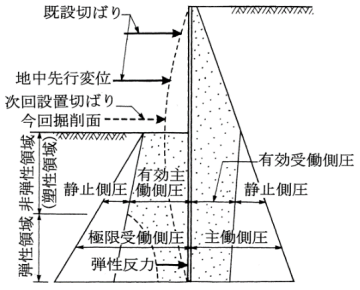
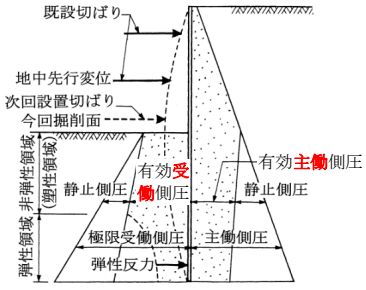
2016年制定 トンネル標準示方書[共通編]・同解説/[開削工法編」・同解説
正　誤　表
（2016年制定・第1版に対応）

2025/4/1現在

頁	条番号	区分	箇所	誤	正
ー	ー	委員構成	トンネル標準示方書改訂小委員会	石川　善大（(株)復建エンジニアリング）	石川　善大（(株)復建エンジニ**ヤ**リング）
共通編					
4	2.2	解説文	上から1行目	計画，設計，施工および施工管理等の…	計画，設計，施工および**維持**管理等の…
開削工法編					
58	6.2.3	解 2.6.6	記号の説明	$V_{yd} = V_{cd} + V_{sd}$　（解 2.6.6） ただし，$p_w f_{yd}/f'_{cd} \leqq 0.1$とするのがよい． ここに，$V_{cd}$ ：せん断補強鋼材を用いない棒部材の設計せん断耐力で，次式による． $V_{cd} = \beta_d \beta_p \beta_n f_{vcd} b_w d/\gamma_b$ $f_{vcd} = 0.20\sqrt[3]{f'_{cd}}$ (N/mm²) ただし，$f_{vcd} \leqq 0.72$ (N/mm²) $\beta_d = \sqrt[4]{1000/d}$ (d : mm) ただし，$\beta_d > 1.5$ となる場合は 1.5 とする． $\beta_p = \sqrt[3]{100 p_v}$ ただし，$\beta_p > 1.5$ となる場合は 1.5 とする． $\beta_n = 1 + 2\,M_0/M_{ud}$（$N'_d \geqq 0$ の場合） ただし，$\beta_p > 2$ となる場合は 2 とする． $= 1 + 4\,M_0/M_{ud}$（$N'_d < 0$ の場合） ただし，$\beta_p < 0$ となる場合は 0 とする． N'_d ：設計軸方向圧縮力 M_{ud} ：軸方向力を考慮しない純曲げ耐力 M_0 ：設計曲げモーメントM_dに対する引張縁において，軸方向力によって発生する応力を打消すのに必要な曲げモーメント b_w ：腹部の幅（mm） d ：有効高さ（mm） γ_b ：一般に 1.1 としてよい．	$V_{yd} = V_{cd} + V_{sd}$　（解 2.6.6） ただし，$p_w f_{yd}/f'_{cd} \leqq 0.1$とするのがよい． ここに，$V_{cd}$ ：せん断補強鋼材を用いない棒部材の設計せん断耐力で，次式による． $V_{cd} = \beta_d \beta_p \beta_n f_{vcd} b_w d/\gamma_b$ $f_{vcd} = 0.20\sqrt[3]{f'_{cd}}$ (N/mm²) ただし，$f_{vcd} \leqq 0.72$ (N/mm²) $\beta_d = \sqrt[4]{1000/d}$ (d : mm) ただし，$\beta_d > 1.5$ となる場合は 1.5 とする． $\beta_p = \sqrt[3]{100 p_v}$ ただし，$\beta_p > 1.5$ となる場合は 1.5 とする． $\beta_n = 1 + 2\,M_0/M_{ud}$（$N'_d \geqq 0$ の場合） ただし，$\beta_p > 2$ となる場合は 2 とする． $= 1 + 4\,M_0/M_{ud}$（$N'_d < 0$ の場合） ただし，$\beta_p < 0$ となる場合は 0 とする． N'_d ：設計軸方向圧縮力 M_{ud} ：軸方向力を考慮しない純曲げ耐力 M_0 ：設計曲げモーメントM_dに対する引張縁において，軸方向力によって発生する応力を打消すのに必要な曲げモーメント b_w ：腹部の幅（mm） d ：有効高さ（mm） $p_v = A_s/(b_w \cdot d)$ A_s ：引張側鋼材の断面積（mm²） f'_{cd} ：コンクリートの設計圧縮強度（N/mm²） γ_b ：一般に 1.3 としてよい． V_{sd}：せん断補強鋼材により受け持たれる設計せん断耐力で，次式による． $V_{sd} = [A_w f_{wyd}(\sin\alpha_s + \cos\alpha_s)/s_s]z/\gamma_b$ A_w ：区間 s_s におけるせん断補強鉄筋の総断面積（mm²） f_{wyd}：せん断補強鉄筋の設計降伏強度で，$25f'_{cd}$（N/mm²）と 800（N/mm²)のいずれか小さい値を上限とする． α_s：せん断補強鉄筋が部材軸となす角度 s_s：せん断補強鉄筋の配置間隔（mm） z：圧縮応力の合力の作用位置から引張鋼材図心までの距離で，一般に$d/1.15$としてよい． $p_w = A_w/(b_w \cdot s_s)$ γ_b：一般に 1.1 としてよい．
93	10.3	図 2.10.3	タイトル	(b)　自由線がない場合 (c)　自由線がある場合	(b)　自由**縁**がない場合 (c)　自由**縁**がある場合
146	3.2.1	表 3.3.1	支圧	表 3.3.1　鋼材の許容応力度（N/mm²） 種類 ／ 一般構造用圧延鋼材（SS400） ／ 溶接構造用圧延鋼材（SM490） 軸方向引張（断面）：210 ／ 280 軸方向圧縮（断面）：$l/r \leqq 18$　210 ／ $l/r \leqq 16$　280 $18 < l/r \leqq 92$　$210 - 1.23\,(l/r - 18)$ ／ $16 < l/r \leqq 79$　$280 - 1.8\,(l/r - 16)$ $92 < l/r$　$\dfrac{1\,800\,000}{6\,700 + (l/r)^2}$ ／ $79 < l/r$　$\dfrac{1\,800\,000}{5\,000 + (l/r)^2}$ l：部材の座屈長さ　r：断面二次半径 曲げ 引張縁（断面）：210 ／ 280 曲げ 圧縮縁（断面）：$l/b \leqq 4.5$　210 ／ $l/b \leqq 4.0$　280 $4.5 < l/b \leqq 30$　$210 - 3.6\,(l/b - 4.5)$ ／ $4.0 < l/b \leqq 30$　$280 - 5.7\,(l/b - 4.0)$ l：フランジの固定点間距離　b：フランジ幅 せん断（断面）：120 ／ 160 支圧：31 ／ 420 誤：31	表 3.3.1　鋼材の許容応力度（N/mm²） 種類 ／ 一般構造用圧延鋼材（SS400） ／ 溶接構造用圧延鋼材（SM490） 軸方向引張（断面）：210 ／ 280 軸方向圧縮（断面）：$l/r \leqq 18$　210 ／ $l/r \leqq 16$　280 $18 < l/r \leqq 92$　$210 - 1.23\,(l/r - 18)$ ／ $16 < l/r \leqq 79$　$280 - 1.8\,(l/r - 16)$ $92 < l/r$　$\dfrac{1\,800\,000}{6\,700 + (l/r)^2}$ ／ $79 < l/r$　$\dfrac{1\,800\,000}{5\,000 + (l/r)^2}$ l：部材の座屈長さ　r：断面二次半径 曲げ 引張縁（断面）：210 ／ 280 曲げ 圧縮縁（断面）：$l/b \leqq 4.5$　210 ／ $l/b \leqq 4.0$　280 $4.5 < l/b \leqq 30$　$210 - 3.6\,(l/b - 4.5)$ ／ $4.0 < l/b \leqq 30$　$280 - 5.7\,(l/b - 4.0)$ l：フランジの固定点間距離　b：フランジ幅 せん断（断面）：120 ／ 160 支圧：315 ／ 420 正：315
179	5.2.4	解説 図 3.5.12	(a)側圧作用状態	 (a)　側圧作用状態	 (a)　側圧作用状態